

---

# 銀色の鱗

並盛りライス

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

銀色の鱗

### 【Nコード】

N8785F

### 【作者名】

並盛りライス

### 【あらすじ】

何日も雨が降り続いたある日、長く働いていたパチンコ屋をクビになった三上のもとに、同じ店で専務をしていた浅田が現れる。浅田は、今の店に不満を抱えているようで……

断続的に降り続けている一生分の雨の音が鳴り響いていた。  
言葉にすれば消えてしまいそうな違和感。

それでも、この現実には押し潰されそうになりながら生きている。  
型の古い赤いプラスチックの扇風機が唸るようにブレイドを回してはいるが、暑さは暴力のように体を蝕む。

八月に入ってから雨は、きまぐれで執拗だ。

壊れてはいない、壊れてはいないのだけれども首が俯いたまま扇風機が回る。

三上はそれを少しでも自分のほうに向けようとして首を持ち上げしてみた。

しかし、一度は前を向いた扇風機はすぐに下を向いてしまう。

ポリウムを落としたTVのテロップには奈良県全域に大雨洪水警報がだされている。

三上は、ただ食い入るように就職情報誌を見ていた。

ページを捲る手や額には玉のような汗が浮かんでいる。その雫がキラキラ光りながら情報誌に染みを作っている。

低く玄関のブザーが鳴る。

三上は訝しげに立ち上がって、豪雨に来る突然の来訪者を奇妙に思いながらも横に扉を開けた。

外には、暗がりでもよく見えないが黒いレインコートを着た男が立っていた。

「どなたですか」

三上が尋ねると男は、被っていたフードを手で剥いだ。

「やあ」

三上は、この男の顔に見覚えがあった。

少し前に働いていたパチンコ屋チェーンの特務の浅田だった。

顔を合わせたのは二度か三度ぐらいだったが、特徴的なスキンヘ

ツドの頭と薄く整った印象的な眉毛を見れば思い出せない人間はいない。

まったく、予想していなかった三上が戸惑っていると、浅田が「上がらせてもらってもいいか」

と聞いた。

三上は無言のまま頷いて、首に巻いていたタオルを差し出した。浅田は、タオルを見て少し躊躇っていたが、額の滴を拭った。

扇風機が沈黙の中で低い唸りをあげていた。

「バカ息子がお前をクビにしたそうだな」

「ああ、おかげで今は無職だ。扇風機も買えない」

「腕のいい釘師が居なくなつて、あの店には痛手だつたらうな」  
まるで、天気の話でもしているかのように浅田が言った。

「ずいぶんと他人事なんだな、クビにしておいて」

「実際、他人事だよ。あんな店は早く潰れてしまったほうが、都合がいいんだ」

「俺のこともそうやって切つたのか？」

「先代はお前の事を気に入っていたらしいがな、私はお前のことが嫌いだったよ」

そう言った三上の顔は真剣そのものだった。

「俺に何か恨みでもあるのか？」

「そうじゃない。私はお前の腕に嫉妬していたんだ」

「本店の専務が？」

「私も昔は釘をやつてた。こんな格好でも一応専務として雇ってもらえるのは、先代の右腕だったからだ」

本当は三上も知っている事だったが、浅田の口から聞くのは初めてだった。

「それにしては……」

「この地位は私が望んだんだ。性に合わない肩書はじゃまだ」

「買いかぶり過ぎじゃないのか」

「釘の事だけじゃない、器の話だ」

「ピンとこない」

「バカ息子が危機感を持つぐらいの何かさ」

「それは冗談だ」

浅田の顔はポーカークフェイスだが、彼なりの気遣いが見受けられた。

「私は冗談がいえない人間なんだが」

「無職の男一人に、なんの交渉がしたいんだ」

半ばうんざりしたように扇風機のように三上は頭を垂れる。

「暑いな」

「おい」

雨の音がだんだんと静まってくると、暑さが戻ってくる。

「あの店を潰してほしい」

唐突に浅田が言う。

「潰す？ 自分の店を？」

「もうあの店は、私たちの知っているパチンコ屋ではない」

「私たち……だと」

「昔の憐憫に浸っている訳じゃない。ただ、今のあの店を見ていると、缶詰工場みたいに思えてくる」

「やっぱりセンチメンタルじゃないか」

三上が言う。

浅田は汗を拭くと、声を荒げた。

「駐車場や広いロビー、無菌室みたいな空間に、同じような人気の機種ばかりが並んで。客層も若くて何を考えてるか分からないガキばかりが座ってる」

「時代の流れだろ」

「お前も分かるだろう、あの時代に生きた人間なら」

「ああ、だが時代に逆行するなんて馬鹿げてる」

「刺されたんだ」

浅田の声のトーンが急に落ちる。

「そんなのは今も昔も……」

三上の方が気圧されたように黙る。

「駐車場で、後ろから突然だ。不正を咎めた訳でも、追いかけた訳でもないのにだぞ」

熱さで火照っていた身体が急速に冷えていく。

「それだって腹が立ったからだろう」

「あれは人間じゃなかった。魚だったんだよ。骨のない魚だ」

浅田も三上も、ヤクザや性質の悪い客とは何年も渡り合ってきた。それなのに浅田は何かに脅えている。

「おい、怒るぞ」

汗が落ちた。それは冷や汗だと三上は思った。

「何年もやってると解る事があるんだ。自分の力量とか、人間の温かさや冷たさも分かる。感情があるんだから当たり前だ」

「でも魚ってのは、生き物なのに無機質なんだ。温かくも冷たくもない、ただ動いて、生きてる」

いったんは止みかけていた雨が突然強まる。

庭にあつたポリバケツを水滴が激しく打ち鳴らしている。

「浅田さん」

親しみと敬意をもって三上はそう呼んだ。

「あの店があんな風だから若い人たちは魚みたいになるってことだろ」

「……」

「でも、それはもったいない、いくら世間が骨のない魚を望んだとしても、俺たちがそれを無視したら腐るだけだ。あいつらがどんな顔して笑うのか、泣くのか見てみたいと俺は思う」

「あんな店でもか」

「パチンコ屋なんて、上等な商売じゃないけどな。退屈してる人間は山ほどいるし、まだまだ可能性があるんじゃないのか」

「なあ三上、私は老いたのか」

「老いたっていいよ。いつかは死ぬんだろ。」

「そうだったな。忘れる所だった」

「俺は辞めてから、気づいたな。そういえば腹がすくって事も、腹が立つって事も、生きるって事と変わらない。じゃあ死ぬって事も同じなんだってさ」

「私は何の話をしに来たんだろうな」

警報が解除された後も相変わらず部屋は湿気に包まれている。

「生モノが痛まないように、クーラーをプレゼントしに来たんだろ」  
「働いて買えばいいだろう」

三上は窓を開けながら言った。

「バカ息子だろうがなんだろうが、社長には違いないんだ」

「まああな」

「そういえば、清掃員を募集していただろう」

「もしかして、バイトとして働く気か？」

「シルバーなんかかってのがあるだろう」

「本気か？」

「深夜の仕事だし、あの社長ならバイト代もはずんでくれるだろう？」  
「？」

「それは……そうだろう」

浅田は、来たときと同じように、黒いレンコートを着てから

「本当は私も辞めるつもりでいた」

と言った。

「だったら辞めればいい。やめて清掃員でもやるか？」

「いや、もう少しだけ、あのバカ社長に付き合ってみるよ」

水たまりに映った浅田の顔を太陽が照らす。

三上は銀色の玉を見る時のように眼を細めた。

雨は止んでいた。





## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8785f/>

---

銀色の鱗

2010年10月8日15時20分発行